

玉川上水・小金井桜 名所の再生・復活に向けて

玉川上水は、平成15年(2003)8月に国の史跡に指定されました。玉川上水を管理する東京都水道局は、平成19年(2007)3月に「史跡玉川上水保存管理計画」、平成21(2009)年8月に「史跡玉川上水整備活用計画」を策定し、「玉川上水の保全及び整備活用」とともに「名勝小金井(サクラ)並木の保存・復活」が進められています。小金井市では、この東京都の計画を受け、史跡玉川上水とともに名勝小金井(サクラ)の再生・復活をめざす「玉川上水・小金井桜整備活用計画」を平成22年3月に、「玉川上水・小金井桜整備活用実施計画」を平成24年3月に策定しました。

【小金井市の主な施策と事業経過】

- ◆ 後継樹の育成と補植
「サクラ並木復活」のため、市民団体と協働で、歴史的経緯に基づき、多様なヤマザクラの苗木を育成し、東京都に提供、補植を進めます。

ヤマザクラの補植を実施した区間	
新小金井橋～関野橋	平成22年度～平成24年度
関野橋～梶野橋	平成26年度～平成28年度
小金井橋～新小金井橋	平成29年度～令和元年度
未整備区間	令和3年度以降に植樹予定

令和3年2月時点で合計約230本を補植



大きく生長したヤマザクラ



平右衛門橋 平成27年7月完成

- ◆ 人道橋の整備
「史跡・名勝を見せる」とともに、その価値を向上させるため、既存の横断歩道を撤去し平右衛門橋(橋名は市民公募)を架設しました。
- ◆ 普及啓発施策
「史跡・名勝への理解を深める」ため、名勝小金井桜展(案内板、案内板、PR活動の強化を行っています)を開催し、PR活動の強化を行っています。
- ◆ 緑の真(宰)線
「人がよりよく暮らす」ため、歩道整備を検討します。

令和3年2月 編纂・発行：小金井市教育委員会 生涯学習課



他の樹木には被圧されるヤマザクラ並木

4 名勝景観の現状

平成5(1993)年、東京都教育委員会は、サクラの現状調査を実施しました。その結果、サクラの本数は約1,100本(ヤマザクラは約60%)ありましたが、ケヤキ等の高木(放置木)に覆われ、五日市街道の排気ガス等、都市化に伴う生育環境の悪化もあって、樹勢が著しく衰えていることが明らかになりました。その後もサクラの枯死が年々加速的に増えています。このように、名勝小金井のヤマザクラ並木は、かつての名勝景観とは著しく異なる現状であり、市民からは再生・復活が求められています。

3 名勝景観の変貌 ～昭和時代～



小金井橋の上から上流(西)に向けて撮影
手彩色写真 明治期

戦前から昭和30年代までは花見の名所として賑わい、名勝景観が保たれてきましたが、昭和40年(1965)、淀橋浄水場(新宿区)の廃止以後、小平監視所下流の玉川上水の水流が停止すると、水路斜面(法面)からケヤキ等の樹木が繁茂し始め、名勝景観の変貌が始まり、法面の崩落・植生の環境変化も進みます。昭和40年代半ばには、ヤマザクラは700本台に減少しましたが、地元

小金井の歴史



富士見桜の石版画

名勝(めいしよう)は、景色(風景)が勝れて美しい場所として広く名が知られている土地(名所)のことをいいます。玉川上水堤(=小金井)のサクラ並木は、200年以上前から花見の名所として知られ、全国的に有名な花見の名所でした。玉川上水堤のサクラ(小金井サクラと呼ばれる)は、野生品種のヤマザクラであり、江戸時代から絶やすことなく植え継がれてきました。

1 名所のはじまり

約360年前、武蔵野の原野に玉川上水が引かれ、やがてその周辺に新田村々が開かれました。元文2年(1737)頃、幕府は新田地域の活性化のため、武蔵野新田世話役の川崎平右衛門定孝(府中押立村名主)に命じ、小金井橋を中心とした上水兩岸にヤマザクラを植えさせました。19世紀に入ると、江戸の文人墨客が紀行文などで紹介し、歌川広重が錦絵(浮世絵)に描き、江戸近郊のサクラの名所として知られるようになり、多くの花見客が訪れました。



歌川広重『江戸近郊八景之内 小金井橋夕照』

2 名所から名勝へ

明治22年(1889)4月11日、小金井の花見に合わせて甲武鉄道(JR中央線の前身)が開業すると、東京近郊の行楽地として大変賑わいました。大正時代になると、地元有志により「小金井保桜会」が結成され、保護運動が始まりました。また、植物学者の三好學博士の研究によって日本有数の多種多様なヤマザクラの一大集産地であることが明らかになり、大正13年(1924)12月9日、「史蹟名勝天然紀念物保存法」に基づき国の名勝に指定されました。名勝指定の範囲は、小川水衛所付近(現小平市)から境橋(現武蔵野市)までの五日市街道に沿った約6kmです。名勝指定当時は約1400本のヤマザクラがありました。

名勝 小金井(サクラ) 指定範囲

武蔵野の末野の草を分け行きて
果てなき花を今日みづるかな



大田南畝 (1749~1823)
江戸期を代表する天才文人
小金井観桜ののち遠桜山人と号す

花観井金

『金井観花詩歌図巻』より
有馬純佑の題字



花の小金井さくららの名所 キタシヨ
昔しや荒野の武蔵野原も
今じや東京の奥座敷
サッサ 小金井 花どころ



『小金井音頭』レコード

⑤ 小金井桜樹碑 (海岸寺)
文化7年(1810)に建立。大久保狭南による碑文には、武蔵野新田開発時代の元文2年(1637)に、幕命によって川崎平右衛門定孝が植えたこととし、植栽の目的として土手の保護、観賞用、夏の遮光、上水の浄化、桜の解毒作用といった実利目的を挙げています。
この碑文は、その後多くの紀行文や地誌で紹介され、小金井桜の起源の典拠として引用されました。

実に元文二年丁巳の歳也
寛文元年丁巳己歳也

⑦ 名勝小金井桜 標柱
大正13年の国の名勝指定を受けて、東京市が小金井桜の中心地である小金井橋に建立



⑧ 小金井橋 (石橋)

⑨ 御成の松 (絵はがき)
天保15年(1844)、第十三代將軍家定(当時世継ぎ)一行が花見に訪れ、ここに御座所を設けて花見の宴を催しました。記念に里人が御座所跡に一本の黒松を植えました。惜しくも平成6年に枯れました。



⑪ 川崎平右衛門供養塔 (真蔵院)
武蔵野新田の生みの親、川崎平右衛門定孝(1694~1767)の供養塔。元文3年(1738)の武蔵野新田の凶作にあたり、多摩郡押立村(現府中市)の名主から幕府の新田世話役に取り立てられ、武蔵野新田82か村の経営に大きな功績を残しました。



花見時の五日市街道と新田農家 (絵はがき)



⑭ 関野橋 (絵はがき)



③ 茜屋橋 (絵はがき)



④ 小金井分水跡
小金井分水は、玉川上水の水を小金井村方面に引いたもので、元禄9年(1696)頃に引かれました。江戸時代には玉川上水から直接、取水していましたが、明治3年(1870)の分水口統合により、砂川(深大寺)用水から分水されることになりました。ここから南下し、山王稲穂神社付近の築樋にまで繋がっていました。

春風の吹きまにまに雪と散る
桜の花のおもしろきかな
明治天皇御製

⑥ 行幸松・行幸松碑
行幸松は明治16年(1883)4月23日に明治天皇が、乗馬で花見に来られた栄誉を伝えるために海岸寺門前の御座所跡に植えられました。植樹後、19年を経た明治35年に、海岸寺は由来を記した碑を建立しました。



⑩ 日の出の桜 (三好學撮影)
北岸にあった名木



⑫ 富士見桜 (絵はがき)
南岸にあった老巨木



⑬ 小金井市文化財センター (旧浴恩館)
下村湖人が小説『次郎物語』の構想を練った浴恩館を改修した小金井市の歴史・民俗資料の展示施設。小金井桜の資料もここで収集・保存しています。

さくら
折遍可ら須
槐字道人

⑮ 桜樹接種碑
幕末、上水北岸の桜の補植を担当した田無村名主下田半兵衛富宅が嘉永4年(1851)に関野橋下流の北岸に造立しました。碑面には「さくら折るべからず 槐字道人」とあり、裏面に補植の経緯を記した桜樹接種記が刻まれています。



⑯ 三代歌川広重『小金井堤乃満花』
明治初めの梶野橋に見立てた錦絵



⑰ 名勝境界石
名勝小金井(サクラ)の東端を示す新田2つの境界石



甲武鉄道〔現JR中央線〕営業開始の広告より
小金井櫻 境停車場より北五六町玉川上水堤の兩岸にあり東の境村に始り西の小川村に至る此間二里餘櫻樹にて其數萬餘株あり及公欄の候に兩岸只真白ふてさながら雲を連なるかど怪しむる、ばかり實に關東第一の花見所といふべし
東京より此地へ遊ばんとするに内藤新留まで此汽車に乗り境の停車場まで下るべし然らば北五六町より上水堤に出づこより櫻花あるより漸次花を眺て小金井の西に至り歸途の喜平橋より左より十三町を往き國分寺停車場まで乗車するを便なりとす或はまた國分寺停車場まで下り喜平橋を出て花を見つゝ櫻橋を來り境停車場にて乗車し歸途も亦便なり